



いすみ鉄道 ムーミン電車

2017年も、あっ！と云う間に3月です。今日は桃の節句、雛人形の前で甘酒を飲み、娘の成長をお祝いする日です。奇遇にも、桃の節句(3月3日)と男の子をお祝いする端午の節句(5月5日)、そして男女が出会う七夕(7月7日)は同じ曜日となっていて、今年はいずれも金曜です。

桃の節句といえば千葉県勝浦市のビッグひな祭りが圧巻との噂を聞きました。もともとは、徳島県勝浦郡勝浦町に端を発するイベントだったようですが、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町とともに全国勝浦ネットワークなるものがあるらしく、一緒になってビッグひな祭りを開催しているようでした。これを一目見ようと出かけたのは3月5日日曜日。ついでなので、勝浦へは菜の花電車で有名な「いすみ鉄道」経由で向かおうと思います。

小湊鐵道を経由して、いすみ鉄道の始発駅である上総中野に到着したのが10時20分。ここから念願の、菜の花電車に乗り込みます。菜の花電車というだけあって電車の色は黄色に緑のラインのムーミン電車、遥か彼方まで続く菜の花畑のど真ん中を走る風景を思い描けば、心が大きく波打ちます。ところが実際は・・・時期が早かったのか菜の花の姿はちょぼちょぼで、インターネットで見かけた写真どおりにはいきません。

このホームページにも、菜の花に囲まれた電車の雄姿を掲示する筈でしたが、それは断念せざるを得ない状況です。しかしながら、沿線の田んぼのあぜ道にはカメラを構えた撮り鉄たちの姿が幾人も見かけられ、人気のローカル路線であることに間違いはなさそうです。かくなる上は、もう少し時期をずらせて、菜の花が満開になった頃に再訪する必要があります。

いすみ鉄道の終点は大原で、JR外房線への乗り継ぎ時間を利用して小休憩しようと思います。ここもローカル色溢れる駅で、駅前に目立ったものは何もなく、通りを歩く人の影も見かけません。少し離れたところにいすみ市観光センターがあって、cafeの幟が掲げられています。

恐る恐る中に入って珈琲を注文。メニューにケーキの写真が載っていたので一緒に注文してみれば、道路を隔てた向かい側に昭和堂という洋菓子屋さんがあり、小皿を持って自分でケーキを買って来るという不思議なシステムになっています。商売そっちのけの雰囲気にも馴れ、美味しいケーキと珈琲も頂いて、次は、どこなくいすみ鉄道350型車両に似たJR外房特急「わかしお」で勝浦に向かいます。



いすみ鉄道 350型車両



大原駅



JR特急 わかしお号



かつうらビッグひな祭り

千葉勝浦のビッグひな祭りを一目見ようと、満開の菜の花で溢れる筈だった「いすみ鉄道」経由で勝浦にやってきました。駅を降りたら観光案内所で観光地図を手に入れて、最初に目指すのは遠見岬(とみさき)神社です。

商店街を歩いていくと、店々の軒先に様々なお雛様が飾られています。いずれも品の有るお雛様ですが、中には最近話題の人を集めた変り雛も飾られていて、観光客の目を引いています。さらに足を進めれば、見えてきたのは遠見岬神社の60段の石段で、そこに飾られたひな飾りは遠くからでも確認できます。人形の数はおよそ1800体、夜になると片付けて朝に並べ直すというそれだけでも感服物のお雛様でした。

覚翁寺の山門前に来て見れば、ここにあるのは11段の大きなひな飾りです。それにもまして巨大なのは、勝浦市芸術文化交流センターのホールに設置されたビッグひな壇。ホールの客席が全てひな壇になっていて、観客は舞台側から眺めるます。その数は6,000体とも言われていて、これまた圧巻の一言です。さらに、町全体では3万体が飾られているとされ、どこから持って来たのだろうと不思議に思ってしまう。

「かつうらビッグひな祭り」と共同開催しているのが御宿の「つるし雛祭り」。御宿は勝浦のとなり町で、勝浦芸術文化交流センターから無料シャトルバスが出ていたので、ついでに立ち寄ることになりました。バスを降りれば、目の前に御宿海岸の砂浜が広がり、ラクダに乗った王子様とお姫様の銅像が確認できます。この地は、童謡「月の沙漠」のモチーフになった場所とされていますが、先に云った者勝ちという雰囲気は否めません。

ところで「沙漠」と「砂漠」の違いについて、「沙」は湿っていて「砂」は小石まじりかと思えば大間違い、沙は人名漢字に指定されている古い字で「沙」と「砂」は同じ意味でありました。

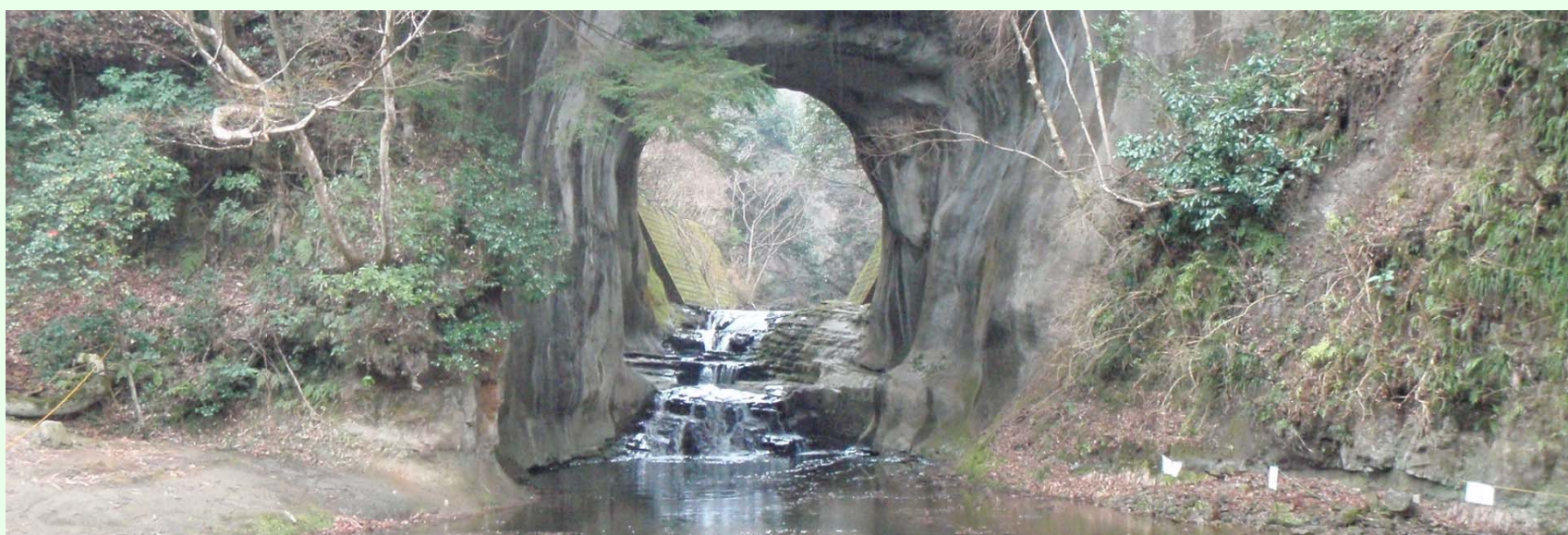
話を戻し、「つるし雛祭り」のメイン会場はその脇にある「月の沙漠記念館」。当日は無料開放されていて、館内に一歩踏み入れればまるでおとぎの国状態。商工会の女性部員が丹精込めて手作りしたたくさんのつるし雛を十分堪能することが出来ました。



勝浦 雛飾り



御宿 つるし雛



「濃溝の滝」

せっかく房総の国までやってきたので、温泉にでも浸かってゆっくりしようと思います。やってきたのは養老溪谷温泉、今日はここに泊ります。養老溪谷の温泉といえば、チョコレート色あるいは濃厚なワイン色といえば聞こえが良いのですが、結局は、タオルが焦げ茶色に染まるような黒い湯をイメージしてしまいます。

黒湯の黒さは、温泉の出る地層に含まれる腐植質が原因とのこと。約40万年前まで房総半島は海底で、陸から有機物を含む泥や砂が大量に流れ込んでいたようです。その時の泥砂が上総層という地層であって、それが海水を閉じ込めたまま隆起し、現在汲み上げている温泉は当時の海水(化石海水)らしいです。腐植質は、その上総層に含まれていた有機物がバクテリアで分解されたもの。どおりで温泉の色が腐植土にそっくりで、どっぷりとお湯に浸かれば、カブト虫の幼虫にでもなった気分です。

さらに有機物を分解する際に発生したメタンガスは、化石海水に溶け込んで南関東ガス田を形成し、約55万世帯(千葉県内の都市ガス需要家数のおよそ30%)に都市ガスとして利用されています。さらに、化石海水には豊富なヨード分が溶け込んで、世界のヨード生産量の30%が日本、しかも日本の90%が千葉で生産されていると云う貴重な地下資源ともなっています。

翌日は、最近Instagramに投稿されて話題となった「濃溝の滝」に向かいます。天気は生憎の小雨、しかしながら清水溪流広場の駐車場はいっぱいで、観光バスも頻繁に出入りしています。[Instagram](#)に投稿されたのがおとしの夏、それ以降、地元の人しか知らない秘境の地は、あっと云う間に誰もが知る観光地となりました。

駐車場に車を止めて5分(350m)ほど歩くとInstagramで紹介された洞窟の前に到着します。しかしながら説明書きを詳しくみれば、本来の名前は「亀岩の洞窟」。本家本元の濃溝の滝は、少し手前にある養老の滝を10分の1に縮小したような小さな滝のことでした。子会社が親会社より大きくなって有名になる例はいくらでもあり、濃溝の滝も目の前の洞窟にお株を奪われてしまったようです。洞窟の手前には、幸運の鐘やハートの絵馬を結びつける鎖まで用意されていて、箱根の九龍神社を凌駕する恋人たちのパワースポットになりそうな予感がします。



清水溪流広場



幸運の鐘とハート絵馬



道の駅とみうら「枇杷倶楽部」

房総の旅の最後に寄ったのは、道の駅とみうら「枇杷倶楽部」。富津館山道路の富浦インターチェンジ、あるいはJR富浦駅へもおよそ1.4kmで、車でも電車で行くにも便利な所です。

「枇杷倶楽部」は、南房総の名産品である房総枇杷(びわ)を看板にした道の駅。生産量こそ長崎県がだんとつの第一位で千葉県は第二位ですが、特に富浦では、250年前ごろからびわを盛んに栽培していると云うことと皇室へも長年献上していると云うことから、日本一のビワの郷と自負しているようです。

ここのお勧めは**びわソフトクリーム**。室内のゆったりとした**休憩スペース**で頂くもよし、木漏れ日溢れる庭先のテラスで頂くもよし、ほんのりと枇杷の甘み広がる爽やかなおいしさです。他にも、びわゼリーやケーキ、びわカレーなどのオリジナル商品も提供されていて、飽きることはありません。



いちご農園

小川を隔てた隣には直営の**いちご庭園**があり、1,500円で30分食べ放題のいちご狩りが楽しめます。栽培されているのは5種類のいちご、納得行くまで食べ比べることが可能です。

特に甘くて美味しかったのは「章姫」(あきひめ)、そして「モモコ」。章姫は静岡県生まれの代表品種。一方、モモコは枇杷倶楽部だけのオリジナルで、ここでしか味わうことのできない品種です。

いちご庭園の辺りを見回せば、黄色い菜の花のジュウタンが広がっています。説明では、「東京ドームがまるごと入る広さの南房総最大の巨大菜の花畑」と云うことで、その雄大さは圧巻です。道の駅とみうら「枇杷倶楽部」は、当時551(現在は1,107)あった駅の中から道の駅グランプリ2000の最優秀賞に選ばれていて、よくある道の駅とはだいぶ様子が違います。ちなみに、2000年以外に道の駅グランプリが開催された形跡はありません。

花摘みでもしようと次に目指したのは道の駅おおつの里「花倶楽部」、同じ富浦町にある道の駅で枇杷倶楽部の売店のお姉さんのお勧めでした。田んぼや畑に囲まれた寂しい道を車で走っていくとたくさんのビニールハウスが見えてきて、そこが道の駅**「花倶楽部」**でありました。



花倶楽部

入り口を入るとお花の売店になっていて、その奥には、花の農園が広がります。道の駅と云うよりは、まさに花の生産農場です。

「枇杷倶楽部」にしても「花倶楽部」にしても、富浦町の道の駅はコンセプトが明確で、地元の農産物や土産物を陳列しただけの道の駅とは一味も二味も違います。この時期は金魚草やポピーが花盛り、ここは房総の春を体中で満喫できる場所でした。